

湯～ねつと

いのち輝く



中登別・桜 三種開花

新機構としての新たな使命と役割

院長 井 須 和 男

すっかり春らしい季節となりました。新緑の季節に合わせるかのように、当院は4月より独立行政法人地域医療機能推進機構（略称はJCHO、ジェイコーと読みます）登別病院として新たな出発を迎えました。昭和21年6月に登別整形外科療養所として発足し、登別厚生年金病院として長らく馴染んでいただきましたが、新しい病院名となりましたもよろしくお願いたします。

JCHOは平成26年4月に発足したばかりの新しい組織で、従来の厚生年金病院、社会保険病院、船員保険病院全国57施設を、一括運営することとなりました。新機構は、地域医療、地域包括ケアの要として超高齢社会における地域住民の多様なニーズに応え、生活を支えることを第一の使命としております。

かつては、人口に占める高齢者の割合は少なく、もともと健康であった人がたまたま病気になったり、けがをしたりした場合に入院治療をしていました。治療によって健康な状態に戻り、退院して元の生活に復帰するのが基本でした。超高齢社会では、健康に問題があり何らかの医療、ケアを必要とする人が多くなってきています。病気やけがの治療が終了しても、地域社会で生活を送る上では様々な支援が必要となることも少なくありません。医療や支援の必要な人が増加してくることからも、急性期の治療から在宅復帰に至る効率的な体制を築きあげることが求められています。単一の医療機関でこれらのすべてをおこなうことは困難であり、医療機関の機能分化が必要とされています。

当院のめざす病院機能は、高度の急性期病院での治療後に、リハビリテーションを行う必要があったり、在宅で生活す

るためのケアの体制を作る必要があったりする人に対する医療を中心とすることになります。そのため、入院治療以外にも在宅での生活を支援するための訪問治療、訪問看護、訪問リハビリテーション、通所リハビリテーションなど従来からの病院機能を継続、拡充する必要があります。また、地域の他の医療機関との連携をふまえて、一時的に病状が悪化した場合に入院治療を含めたバックアップをおこなう機能も重要と考えます。健診を含めて、地域の皆様の健康、生活機能の維持に責任をもってあたれる医療機関を目指したいと思っております。

加えて、地域の中核病院として、現在もおこなっている救急、整形外科疾患、内科疾患の急性期医療も維持することは重要と考えます。疾患の種類、重症度によりましてはより高度の急性期医療機関と連携をとり対処していきたいと思っております。

最後に、新機構発足にあたっては、社会的な説明責任を果たしつつ、透明性が高く、財政的に自立した運営を求められています。従前の運営方法とは変えざるを得ない点もでてくるかもしれません。これからも、地域の中核病院として皆様にご信頼いただけるよう努力していく所存ですのでよろしくお願いたします。



院長 井 須 和 男

JCHO 登別病院「整形外科」の特徴

統括診療部長・整形外科部長 小澤 慶一

4月より「JCHO登別病院」となり、整形外科スタッフも気持ちを新たに臨んでおります。登別市、白老町を中心とし、室蘭市、伊達市など近隣の地域の皆様が健康に過ごせるよう、引き続きお手伝いをさせて頂ければ、幸いです。

JCHO登別病院「整形外科」の特徴を挙げてみました。

1. 骨折・外傷の治療（救急体制）

子供から高齢者に至るまで、骨折・外傷、また、整形外科の病気を24時間、365日、無休で受け付けしており、登別・白老の救急隊とも連携し、地域の皆様に、安心して、受診して頂ける体制をとっております。必要な患者様には入院や手術治療、その後の一貫したリハビリテーションで、元気に御自宅へ帰るまでサポートしておりますので、ケガをされた際には、まず登別病院を思い出して頂き、受診をされて下さい。

2. 高水準の医療技術

伝統ある整形外科病院として、首や腰

の脊椎手術、膝や股関節の人工関節手術、関節鏡による肩関節手術などに幅広く対応し、近隣の皆様が、遠くの病院にわざわざ治療にいかなくとも、当院で満足して頂ける治療が受けられるよう、日々、医療をおこなっております。

3. リハビリテーション

道内随一の施設・スタッフにより、入院・手術の直後からリハビリを開始し、必要な方には温泉プールを利用したリハビリもおこないます。また、温泉入浴は毎日、自由に可能です。リハビリ病棟を有しておりますので、退院まで一貫したリハビリで、特に高齢の方には、リハビリスタッフが自宅を調査するなどし、自宅での生活が安心して出来るようになるまで、入院リハビリをおこなっております。退院後の在宅リハビリも可能です。

今後とも、皆様が安心して受診して頂ける「整形外科」として、精進して参りますので、よろしくお願い申し上げます。



病院正面玄関



病院1号棟外観

漢方の知恵でもっと健康に

内科診療部長 星野 一也

漢方について、「うさんくさく効かい」とか「非科学的」といったイメージを、もたれる方も多くいらっしゃると思います。確かに患者さんの体質や全身的な所見に合った薬ではなく、病名のみから選択された薬では充分に効かない場合がほとんどです。しかし、漢方医学的な診断に基づいて選ばれた漢方は、治療や病気の予防に大きな力を発揮することも事実です。また近年、漢方の作用が科学的に解明され、現代医学的にも検証されつつあります。

漢方のよさを多くの方に知っていただくために、実際の診察経過を紹介しながら説明致します。Aさん（女性、50代、主婦、パート作業）は、突然の難聴と耳鳴を自覚し、耳鼻科を受診。突発性難聴と診断されました。治療により聴力は回復しましたが、耳鳴がおさまらず漢方治療を希望されて来院しました。問診で、仕事などでストレスが多い。元来、のぼせて汗をかきやすい。めまいや頭痛もつらいとお話されました。診察所見として、やや太り気味の体格で、顔色はやや紅潮。脈はほ

どよく緊張。舌に歯形がみられ、舌の裏の静脈が、やや拡張しています。おなかには腹壁に厚みがあり弾力的です。以上の所見より漢方医学的に、実証、熱証、気の上衝、瘀血、水毒と診断し女神散を処方しました。4週間後、耳鳴はほぼおさまり、のぼせや発汗も改善していました。以後、服用中です。漢方医学では体の局所の症状や表に現れる症状の背景に全身の生命活動のバランスの乱れがあり、このバランスを整える事により病気が治るという考え方をします。バランスの傾きや体質を判断するために、全身の身体所見や精神状態などを診察し、また生活歴なども重視します。患者さんを、全体として診る事により漢方医学的な診断（「証」と言います）がなされ、「証」にもっとも合った薬が処方されます。このため、同じような症状でも、患者さんによって処方される薬は異なります。このように「証」に基づいて薬が決められますので、患者さんの「証」を見極める事はとても重要となります。



この患者さんに処方された女神散は日本で作られた薬で、江戸時代の医書に、元は安楽湯と呼ばれ戦場でのノイローゼに使われたと記載されています。この薬には香附子、川弓、蒼朮、当帰、黄芩、桂皮、人參、檳榔子、黄連、甘草、丁子、木香という12種の生薬が配合されています。西洋医学の薬は、単一の有効成分が化学的に合成されて作られますが、漢方薬は、数種類の生薬と呼ばれる天然物（大部分は植物の根、茎、葉、花、種、実など。一部動物、鉱物由来）が混ぜ合わされて作られています。

一つの生薬自体に多くの成分が含ま

れていますので、複数の生薬がブレンドされている漢方薬には、非常に多くの成分が混じっています。これらの複合された天然成分が、全体として調和した作用を及ぼし、体全体に多様に働きかけます。このため、一つの薬で、患者さんのいろいろな症状に効果のみられる事がよくあります。

当院の漢方外来では、漢方の診察のみでなく、西洋医学的な診察も行い、また必要な検査は全て行うようにしています。西洋医学と漢方医学の両方のよいところを活用し、統合した医療を行う事が、患者さんに本当に役立つものと考えています。



香附子



川弓



蒼朮



当帰



黄芩



桂皮



人參



檳榔子



黄連



甘草



丁子



木香

JCHO 登別病院 通所リハビリテーション・ 短時間通所リハビリテーション「トレユ」

通所リハビリテーション責任者・副看護師長 只野 まみ

当院での通所リハビリ事業は介護保険が始まる2年前の、平成10年から開始しています。介護保険制度が始まってから、早や14年が過ぎようとしておりますが、平成10年4月から通所されている利用者さまも3名いらっしゃいます。

通所リハビリは介護保険サービスのひとつで、「デイケア」とも呼ばれています。

通所リハビリには現在2名の理学療法士と、1名の作業療法士が専従でリハビリの対応をしています。他に2名の看護師と、介護福祉士など介護職員7名を配置しております。

私たちは介護認定を受けられた皆さまの「住み慣れた居心地のいい街で、愛する人と、自分らしく生きていきたい・生き終えたい」という願いを叶える事を目標に、リハビリはもちろんのこと、遊びを交えた活動や、季節を感じて頂けるような行事、そして時には茶碗洗いなどの作業も交え、利用者の皆さまと大笑いしながら、若々しく過ごしていただけるようお手伝いをしております。

団塊の世代と呼ばれる方々も、高齢期に突入し、これから高齢化はますます加速すると言われております。より多くの方々のニーズにお答えできるように、平成25年8月からはリハビリテーションに特化した短時間通所リハビリ「トレユ」も開設しました。若くして障害を抱えられた方、障害を抱えながらも仕事や家事等の役割を持たれている方、たくさんの方との交流は苦手だけどリハビリが必要な方々にとっては、利用しやすい場となっているようです。利用当初は車

椅子使用だった利用者さまが、数ヶ月のご利用で杖歩行等にまで改善する等の成果報告も増えています。

いろいろな障害を抱えながらの生活は、介護される方にとっても、介護する方にとっても決して楽なものではありません。とは言え、ちょっとした訓練や、工夫で改善できることはたくさんあります。

現在82名の方々がご利用され、長年関わらせていただいた方も合わせると、これまでに数百名の方々にご利用頂いております。介護は千差万別、なかなか教科書通りにならないことも多くあります。現在専従のリハビリ職員が3名のため、すぐにご利用いただけない場合もありますが、様々な経験から得た知識や技術で皆さんのお役に立てる事がいろいろあると思います。ちょっとしたアドバイスが、生活を楽にするヒントになればと思います。百聞は一見にしかず、見学を兼ねてお気軽にお立ち寄りくださいね。（見学ご希望の際には、病院へ事前にお電話下さいね。）



通所リハビリテーションのスタッフ

登別市地域包括支援センターゆのかのご紹介

登別市地域包括支援センターゆのか・主任介護支援専門員 菊池 豪

地域包括支援センターは、高齢者のみなさんが抱える生活全般の困り事や悩み、不安等をお伺いし、できる限り住み慣れた自宅（地域）で安心した生活が送れるよう、支援するところです。

私たち「ゆのか」は、市内3カ所ある地域包括支援センターの中で、中部地区を担当しています。平成18年4月に登別市から介護予防事業等の委託を受け、総合福祉センターしんた21に事務所を開設しました。現在は5名の職員が勤務し、主任介護支援専門員、保健師、社会福祉士といった専門的資格を有している職員を配置しています。

今回は、新機能移行の記念すべき広報誌第1号ですので、当院の在宅支援事業の一つ、地域包括支援センターについてご紹介させていただきたいと思っております。

左下に掲載されている写真は、地域包括支援センターのパンフレットです。相談支援の機関として、地域住民のみなさんから、生活・介護の相談、健康の相談、権利を守る相談など、多岐に渡る内容のご相談をお受けしています。

昨年度（平成25年度）は、255件の新規相談をお受けしました。相談は無料です。プライバシーに配慮し、丁寧な対応を心掛けています。

相談の方法は、電話、訪問、来所など、

状況に応じて対応できますので、お気軽にお問い合わせください。

相談支援の仕事以外にも、福祉に関する情報の発信や提供、講座開催（介護の日講演会、認知症に関する講演会等）の企画や運営、住民の方と“介護”に関して話し合う「住民参加型の地域ケア会議」開催といった活動があります。こうした活動は、住み慣れた自宅で安心した生活が送れる地域を目指した取り組みです。

福祉に関する情報発信の最新トピックスは、右下の写真に掲載している「くらしにあったか便利帳」です。平成24年に第1版を発行し、今年4月に更新しました。食料品や日常生活必需品、お薬や仏花まで、配達や訪問のサービスが受けられる店舗を一覧にまとめているものです。登別市役所や市民会館、老人福祉センター等に置いてありますので、お役立ていただければと思います。

最後に、高齢になっても住み慣れた地域で安心した生活を送ることができるように、些細であっても日常生活に支障を感じるお困り事や不安等がありましたら、地域包括支援センターゆのかへご相談ください。（☎88-2106）一つ一つ丁寧に相談をお受けし、対応いたします。



「フンベ山」に登る

登別の海岸には、クジラにまつわる伝承が色濃く残されています。フンベ山はその代表的なところのひとつです。JR登別駅から海測に横たわって見える小山のことです。

車で臨港線を走っているときなど、気まぐれに立ち寄ることがあります。地勢的には、ただの独立した小山に過ぎませんが、このごろはここに健気さみたいなものを感じています。両手を大きく広げて、颯風（ぐふう）すら防護しようとする、そんな仁王像のイメージを重ねたりするのです。

少し前まで、ここはアイヌ語で「フンベ・サパ（クジラの・頭）」と呼ばれ、祭祀場のある聖地だったのです。いま散策路が巡っていて、土の感触を確かめながら、高見をぐるっと周回することができます。さわやかな心地がして、また厳かな気流のようなものを感じたりします。

入口は登別漁港の左手にあり、すぐ見つけられます。短い坂道になり、そこはツルウメモドキなどが絡まる緑のトンネルで、抜けるとヌサ・ウン・コッ（幣場・へ行く・沢）に出会います。その低みなりに、右手をゆるゆるの上がると最高部になります。視界のすべてが太平洋、さえぎるものはありません。

しばし沈黙のあと、きっと深呼吸したくなるでしょう。海蝕崖をせり上がってくる風が足もとをさらい、樹幹を越えていきます。そんなときです。どこかに潮を吹き上げる鼻孔はないか、そんな幻視を期待したりするのです。若いころに観た映画『白鯨』（Moby・Dick）、あの迫力をまだ覚えているからです。

グレゴリー・ペック扮するエイハブ船長が、巨大クジラと三日間死闘をくり返すのでした。あの舞台となっ

た海原が、日本近海を想定したものだ、最近になって知りました。捕鯨大国だったアメリカ船団を、ここから眺められたかも知れません。

名著『幌別町のアイヌ語地名』（知里真志保・山田秀三）は、34ページの小冊子ですが、205の地名が採録されています。手書き地図に添えられているのも、うれしいことです。なにより「フンベ・サパ」の項には、1ページ以上も費やされています。「古くは鯨の祭場だったかもしれない」とあります。

フンベ山は“登別軟石”（溶結凝灰岩）の岩塊でもあって、早くから用材として利用されてきました。そのため山容は、大きく様変わりしているはずですが、とくに幌別側に面した「オンネ・ヌサウシ」（古い・幣場）は、全壊したのかも知れません。

一度、登別のコタンに伝わる『クジラ踊り』のクジラ役になったことがあります。浜に打ち上がった「寄りクジラ」が役どころ、だからセリフや演技はなく、寝ているだけでした。杖をついた盲目の老婆が近づき、小突いたりして「寄りクジラ」を確認、みんなが集まります。輪になってウポポ（歌）や踊りが始まるのです。喜びとユーモアにあふれた素朴な呪術劇でした。

大正十一年（1922）まで、片倉小十郎ゆかりの刈田神社の鳥居が、クジラの顎骨だったことは有名な話です（注1）。クジラは世界的に貴重な資源であると同時に、いまでも神さまとして畏敬される海の哺乳類です。（05・02，地虫）

（注1）『郷土史探訪・郷土史点描』（宮武神一）



登別漁港からのフンベ山

ジェイコー
what is JCHO ?

地域医療機能推進機構とは

特徴

- 全国に広がる病院群で、ナショナルスケールメリットがあります。(地理的特徴)
- 病院だけでなく、介護老人保健施設を有し、リハビリテーション体制も充実しており、超高齢社会のニーズに対応するポテンシャルがあります。(機能的特徴)
- このため、「急性期医療～回復期リハビリテーション～介護」のシームレスなサービスを提供できるグループとして、時代の要請に応える使命があります。(使命ある存在という特徴)

沿革

全国の社会保険病院等(社会保険病院、厚生年金病院、船員保険病院)は、これまで、独立行政法人年金・健康保険福祉施設整理機構(RFO)が(社)全国社会保険協会連合会、(財)厚生年金事業振興団、(財)船員保険会に運営を委託して医療を提供してきました。

年金・健康保険福祉施設整理機構法の改正(平成23年法律第73号)により、平成26年4月にこれらの病院はRFOが改組されて発足した独立行政法人地域医療機能推進機構(JCHO)が直接運営する病院グループとなりました。

JCHOは、5事業(救急医療、災害医療、へき地医療、周産期医療、小児医療)、5疾病(がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病、精神疾患)、リハビリテーションその他地域において必要とされる医療及び介護を提供する機能の確保を図ることを目的としています。

施設数は、病院57、介護老人保健施設26、看護専門学校7、健康増進ホーム3です。

使命

- 01 地域医療、地域包括ケアの要として、超高齢社会における地域住民の多様なニーズに応え、地域住民の生活を支えます。
- 02 地域医療の課題の解決・情報発信を通じた全国的な地域医療・介護の向上を図ります。
- 03 地域医療・地域包括ケアの要となる人材を育成し、地域住民への情報発信を強化します。
- 04 独立行政法人として、社会的な説明責任を果たしつつ、透明性が高く、財政的に自立した運営を行います。



編 集 雑 感

今年の春の到来も例年のごとく天候不順によってすっきりしないものときめ込んでいましたが喜ばしいことに全く違っていました。

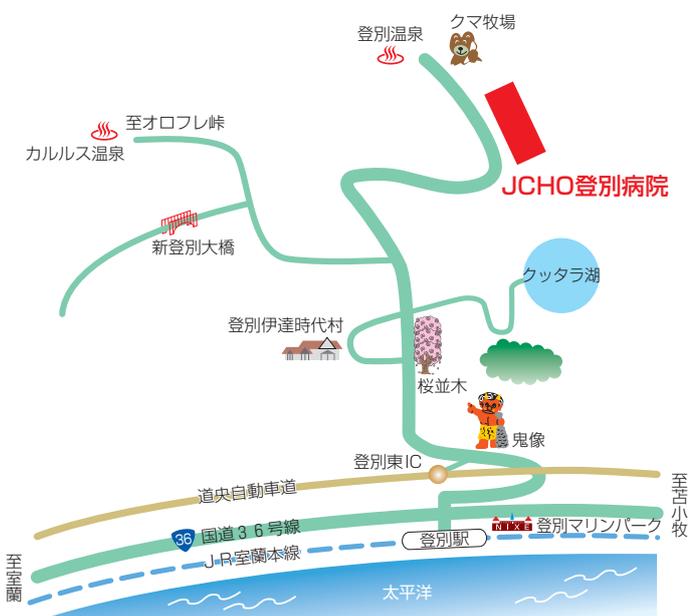
室蘭气象台によると登別市における4月の日照時間は今年の4月が観測史上最も長時間となって記録的な晴天に恵まれたと伺いました。確かに残雪の消えも早く草木の若芽が萌えてきて、又春を告げる花々も一斉に咲き出したことからもうなずけます。気温の上昇と共に柔らかい陽光に包まれて春の息吹を全身で感じたときの心地よさと冬の厳しさからの開放感もあってすばらしい季節感を久し振りに得られたことは嬉しい限りでありました。

さて当院は4月の好天の中で病院名を「ジェイコー登別病院」と改称して船出しました。真に「天気晴朗なれども波高し」の意識を強く持って出港いたしました。地域医療の充実と貢献を目指して全職員が一丸となって努力し進んでまいります。当院の基盤を一層固めていくためには地域の方々との連携が最も大切なことと考えております。その観点からも「湯〜ねっと」は引き続き発行しますのでご愛読頂きたいお願い致します。

**お知らせ 禁煙外来は毎週金曜日午後から毎週火曜日・木曜日の午前中に変更となりました。
(完全予約制)**

<各交通機関>

- JR登別駅下車（特急列車停車）登別温泉行きバス（病院前下車徒歩2分）
- 札幌－登別温泉高速バス（終点下車徒歩10分）
- 道央自動車道：登別東インターより7分



(公財)日本医療機能評価機構認定病院
総合リハビリテーション承認施設

ジェイコー
JCHO 登別病院

独立行政法人地域医療機能推進機構登別病院

〒059-0598 登別市登別温泉町133番地
TEL(0143)84-2165 FAX(0143)84-3206
<http://nobaribetsu.jcho.go.jp>
main@nobaribetsu.jcho.go.jp

出版責任者 院長 井 須 和 男
編集長 事務部長 森 田 克 徳